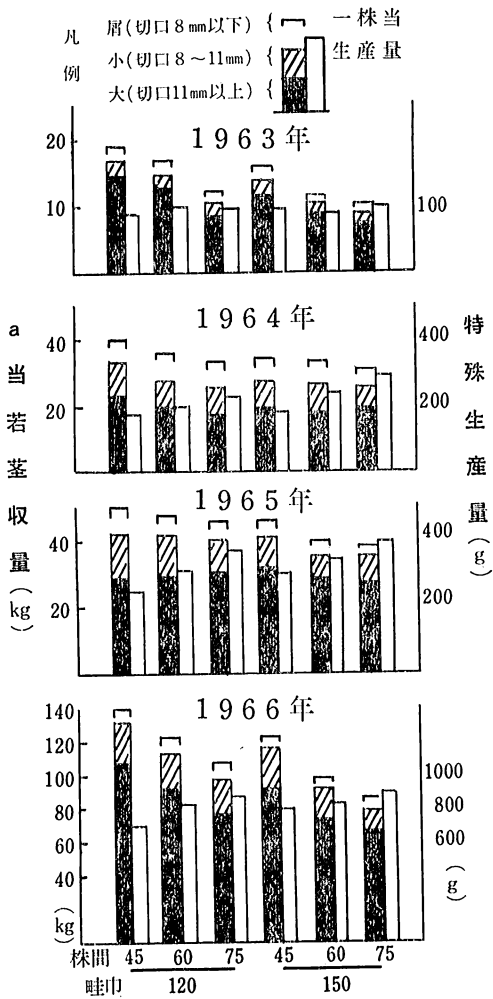




第1図 年次別若茎収量



に殆んど差が認められず、したがってa当り収量は株数の多い密植区が多収であった。定植3年目(1964年)、4年目(65年)においてもa当り収量は大体同様の傾向で、密植区やや多かつたが、その差は小さくなり、とくに切口径11mm以上の大物では定植4年目(1965年)になると粗植区が多くなる傾向があつた。また1株当り生産量では密植区が明らかに少なくなつて来て、密植及びうね巾の狭いための害が現われはじめた。定植5年目(1966年)ではa当り収量は密植区が多く、とくに120cmうね巾の方が多かつたが、これは150cmうね巾の区が紋羽病の被害が多かつたためである。

第3表 収穫若茎の調整前における茎長別本数比率 (1965年)

区別	平均茎長	17cm以上	13~17cm	13cm未満
cm	cm	cm	%	%
120×45	17.2	65.3	27.3	7.4
120×60	17.0	61.9	34.9	3.2
120×75	16.5	53.9	36.5	9.6
150×45	18.2	81.0	16.6	2.4
150×60	18.7	80.9	19.1	0
150×75	18.3	78.6	19.0	2.4

培土について、収穫開始前にはあらかじめ株上30~45cmの培土を行ない、若茎の軟白を行なうのであるが、この培土作業がうね巾の広狭により難易の差が認められ、120cmうねでは培土を株上30cm以上にするとは著しく困難であつた。収穫若茎を調整前に調査した結果では第3表に示すとおりうね巾120cmの各区では茎長の平均が17cm内外であり、長さ13cm未満の格外品も多かつたが、これは培土の不足によるものである。うね巾150cmの場合でも初めの2~3年には35cm位までの培土は容易であつたが、5年目においては株が大きくなり培土の中を穴きく必要があつて高さを充分にとることが困難となつて来た。又培土に当つてうねが狭いと根の切断、露出が多く、収量及び地上部の生育に悪影響を及ぼすようである。

以上の結果より、うね巾は120cmでは初期の収量が多いようであるが、培土が困難であり、貯蔵根の切断露出も多く、若茎も規格に満たないものが多くなる傾向があるのでホワイトアスパラガス栽培においては不適當であると思われる。うね巾150cmでも定植後数年間は培土にもあまり支障はないが、5年目以後になると120cmの場合と同様の障害が出るようで、さらに長期の栽培を続けるためにはうね巾をもつと広くすることが必要と思われる。株間については、密植では株当り生産量は少なくなるが株数が多くなるためa当り収量は増加するので、定植後2~3年間はさらに狭くしてもよいのではないと思われる。したがって定植時は株間30cm位の密植とし、年数を経て密植の害が甚しくなれば、間引を行なうことも一方法ではないかと思われる。